

講演

広島大学の思い出

井内 慶次郎

はじめに

座って失礼致します。先般、頼教授（頼祺一）から広島大学五十年史編集室主催第一二回研究会に出てきて何か思い出でも話さないかという事で、うっかり引き受けました。はてと思つて、東府事務局長（東府義之）にどうしようと相談、広島大学の五十年史（『広島大学50年』広島大学五十年史編集専門委員会・広島大学五十年史編集室、一九九九年）、それに何度か広島大学の冊子等に寄稿したり（『広島大学に寄す』『学内通信』一八一六、広島大学広報委員会、一九八六年）、講演しました時の記録（『ひとりの卒業生として』『廣大フォーラム』二六一八、一九九五年）等もありますので、それらの資料を東府事務局長に送ってもらつて、一応全部読み直しました。何とか記憶を蘇らそうと努力を致した次第でございます。考えてみますと、私の人生でもっともご縁の深い広島大学のことを回想するということは、私自身の歩んできた人生そのものを回想することでもありますので、客観的な自己認識としても、本来必要だったんだと、ようやく八〇歳近くなつ

て気付いた次第であります。

幸い森戸初代学長（森戸辰男）から牟田現学長（牟田泰三）まで全学長に親しくしていただき、ご指導にも預かりましたので、歴代学長の就任月日と、おおむね昭和三〇（一九五五）年以降、私が会計課副長になつて国立大学に関係するようになりまして以降の、広島大学と関係のありそうな事項で気付いたものをメモにしました（四二頁掲載）。これは私にとって初めてのこういった形のメモでありまして、いわば第一次原案みたいなものであります。これをよすがとしながらお話をするのも本日初めてでございますので、どういうことになりましか、正直不安なんです。私にこういうことをやる意味を気付かせていただいで、こういうメモを作るチャンスを与えていただいたことを感謝します。これからこのメモを充実させていくつもりであります。このように学長先生をはじめ皆さまを前にして、一人で入社試験を受けておるようであります。よろしくお願い致します。

回想とか回顧とかいいますと、どうしても感傷が入って甘くなります。どうやって冷静に振り返るかということは、私は性格上もともと

苦手ではありますが、何とか努力してみます。多分、うまくいかないと思いますので、そこは頼先生訂正方よろしく願います。私の尊敬するコラムニストに石井英夫(産経新聞論説委員)という人がいます。この人のお書きになったものを読んで非常に感心致しましたので、石井さんの文章、これから使わせてもらっていいですかとお願いしたら、どうぞお使いくださいとのこと、その後使っておりますものが、二つあります。一つは鳥が、飛びながらこう下を見る鳥瞰、俯瞰と言いますね。高いところからものを見るといいう。いいコラムを書くには高いところからこうじつと下を見るような鳥瞰、俯瞰の能力がないとコラムは書けません。しかしそれだけではだめなんです。もう一つ、これ、石井英夫さんの造語らしいんですが、虫という字に、入学試験の験ですね、「虫験」という造語を自分は作ったと。で、コラムを書くのには虫が地べたを這って、自分の舌で触知するということが、鳥瞰と触知と両方なければ、よいコラムは書けないと書いておられましたので。はー、なるほど、触知ということが、虫験ということがあるのかと思つたのですが。鳥瞰と虫験とするならば、私などは、大学についても、広島大学についても、鳥瞰、俯瞰は大いにやったのですが、実際に広島大学の中に入って、苦しみながら舌なめずりしながら、触知する、触って知るといふことをやっておりますので、そこを十分注意しなければならぬと思います。ただ、幸い附属中学校に学び、広島高等学校に学びました。多くの立派な先輩、同輩、後輩をもたせていただきました。そういう方々は、文部省におるからというのではなくて、一人の人間として付き合っていたきました。本音

を聞かせてもらいました。これが私の触知できないものを補つてくれる上で、どれだけありがたかつたか分かりません。普通の文部省の人よりも、やはりアカシア会(広島高等師範学校附属中学校、広島大学(教育学部)附属中・高等学校の同窓会)を通じて、広島高等学校の同窓会を通じて、郷里広島を通じて、何か触知に似たようなことをさせてもらったということが、私の大学学術行政を支えた非常に重要な要素であつたと思います。心から感謝しています。それが一つです。

もう一つは、これも石井さんの言葉なんです。干し椎茸と切り干し大根はそのままかじつたつてだめだと、水に戻さなければ味は出ない。歴史的な事実、その歴史的な事実が生み出されたその時の水に漬けてみなければ、本当の味は分からないと。それで今度、昭和三〇年からのことをずっとふり返つてみますと、後ほど触れますけれども、悲しい事件もありました。私はアカシア会ですが、アカシア会会員の楽しい思い出の一つは、夏、室積(山口県光市)に行つて、臨海学校で一週間か一〇日泊まるというのが本当に楽しみでした。ところが、官房長の時に附属の上野さん(附属中・高等学校長上野実義)が飛び込んできて、「井内さん、相済まん」と、「子どもが死んだ」と。初めて死傷者が出ました(昭和四七年七月二五日)。それで室積は終わり。もうその後再開できてませんね。その時、上野さんと二人で官房長室で天を仰ぎました。そういうこともありました。そういうことを思い出ますと、昭和三〇年以降、いろんなことを回想するにつけて、今回メモを作ってみました。それぞれをやはり、これから私も努力しなければだめなのですが、その時代の水に戻してみるといふことをしな

ければいけないんだということを痛感致します。以上前置きと致しまして、お話に入ります。

一、小学校、中学校、高等学校時代の思い出

このメモに入る前の前史、小学生の時の楽しみの一つに広島高等工業の学園祭のようなものがありました。小学生の時、本川小学校です。本川小学校の学童が何人かで楽しみにしておったのが、高等工業の学園祭です。行きますと、雷様が鳴るのですね。天井から雷が落ちるのが見える。それから金魚がとたんに凍ってしまう。そういう実験を小学生の時見たのは驚異でした。で、毎年、何人かで広島高等工業に行ったものであります。東広島市に広島大学は移りましたが、広島市もやっぱり見捨てないでいただきたいと思います。昔の広島の子どもにとってはですね、文理科大学があり、高等学校があり、高等工業があり、高師があるという、三高専と言いましたけれども、これは市民の誇りであり、子どもの時から馴染んだものであります。

附属中学校の時、教生実習があります。倫理学の西晋一郎先生が教生実習にお見えになる時は、二・三日前に情報が入るのです。「何曜日何時に西博士が何年何組の授業をご覧になるよ」。その時だけは、附属中学校のガキ共も緊張致しまして、借りてきた猫の様な顔をしていました。教生の方も緊張していました。附属の先生も緊張しておられました。風の如く西晋一郎先生が入ってこられて、授業を見ながらそっと回って風の如く出られるのです。そして、ほっとしたものです。

で、附属中学では当時三年生位になると、岩波全書の『東洋倫理』を買って分からないままに読んだものです。そういう思い出があります。ですから、今の中学生もずいぶん変わったと思いますけれども、やはりその、大学というものが子どもに与えたり、市民に与えたりする影響は本当に大きいと思います。大学図書館に附属の中学生も入ることができました。万巻の書と言いますが、学問というのは大変なんだな、重くて厳肅な恐ろしいものだなというような印象を、大学図書館の雰囲気から感じたものでした。

それから、高等学校の時、細川藤右衛門という教授がおられました。原爆で亡くなられました。数学の教授でしたが、文科の学生に対してですね、「広島大学の誇るべきものの一つは、広島文理科大学の波動幾何学である」と。確かイギリスから留学か研究で勉強に来てたんじゃないですかね。また、文理科大学に高田三郎先生という方がおられました。倫理学です。ニコマコスの倫理学という本を翻訳して、作られた『ニコマコス倫理学』。厚い本でしたが、ニコマコスの倫理学を読んで、感激し、高田三郎先生の牛田のお宅に行つて、夜中までお話をすることがあります。私にとりましては、今広島大学に入っております母校の中学校・高等学校、いづれも本当に自分自身の人間形成にとって非常に重い意味を持っております。以上、前史であります。

二、大臣官房会計課副長時代

メモに入ります。森戸先生が学長になられたのは昭和二五年の四月一九日で、開学記念式は一月五日になっていますね。で、森戸学長の時、昭和三〇年の四月に私は会計課副長になりましたが、昭和三〇年は保守合同がおこなわれ、いわゆる一九五五年体制がとられた時です。この時の私の記憶に非常に残ってますのは、県立医科大学の広島大学医学部への移管完了です。医学部の広島市転出に伴い、病院も移ってきましたが、その時呉市に分院を置きました。三二年の四月一日のことです。この時に会計の副長で予算に関係しておりました。広島県の財政課長は高等学校で一緒の萩原君（萩原幸雄）でした。呉に分院ができました。その時に、確か大蔵大臣が池田勇人先生だったんですね。池田さんだから呉に分院を置かなきゃならん、ということでしたが、置いてしばらくして呉分院にこだわらず、広島に集中整備した方がよいとなりました。池田勇人さんが淡々とした意見だった由です。伝聞ではありませんが、その時は驚きました。私は文部省におりまして、灘尾先生（灘尾弘吉）とか池田勇人先生とか、ああいう方々は文教に對して、大学に対して至極ものの見方が本質的、正確で、決して目先のことで判断されない。そういう見識をその時しみじみ感じました。

三、大学課長時代

1 森戸辰男・皇至道先生のこと

それから三三年まで会計の副長で、会計の副長から大学課長までの間に視聴覚教育課長と助成課長をやりましたが、大学課長になりましたのが三八年で、メモを見ますとですね、同じ日付で皇先生が学長になつておられる。同じ日付でした。皇先生につきましては、私、今でも覚えておりますのは、大学課長として大学課の席に座ってしばらくして皇先生お見えになりました、「君、大学課長で苦勞だな」と言つて、皇先生がお書きになった大学論の著書（「大学制度の研究」）を頂きました。おそらく、国立大学の学長さんの中で大学論の著書のおおりになるのは、少ないのではないのでしょうか。その時に、「井内君、大学の問題というのは大変だよ」と、「僕も自分の学問の研究対象として大学のことをやったけれども、もし何か参考になればと思って持ってきた」とおっしゃいました。皇先生の大学論についての著書を頂きました。ヨーロッパの大学が中心。日本における講座制とはなんであるか、そういう非常に伝統的なクラシックな大学論は、皇先生の著書で教わったわけです。

昭和三八年四月一日、私が大学課長になったその四月一日に、工学部に修士課程が置かれました。新制の大学に修士課程が置かれるようになったのが三八年からですね。旧制の高等工業の中でトップに近い評価を受けたのが、本学の工学部です。やがて、工学関係の大講座制がとられて、博士課程が置かれますが、その経過は私にとっても非常

に嬉しい経過でございました。

なお、メモに「三八年一月二八日 中教審『大学教育の改善について』答申(第一九回)」となっております。この答申が終わって、天野貞祐先生から森戸先生に中教審の会長がバトンタッチされました。

この中教審の答申をまとめられたのは森戸先生です。第一五から一六、一七、第一八まで特別委員会がありました。その特別委員会の主査は全部森戸先生です。で、第一五が目的・性格、第一六が設置・組織編成・管理運営・入試、第一七が厚生補導、第一八が大学の財政です。その四つの特別委員会の主査を全部ご担当になったのが、森戸先生です。今、三八年度答申を勉強している人は少ないと思いますが、戦後出た大学に関する答申の中で、これは非常に重いものです。昭和四六年の中教審の四六答申。四六答申は森戸先生が会長の時です。ですから、文部省のやってきた大学行政の中の非常に主軸になっているところは、森戸先生が関係された中教審の答申を基礎としたといつてよいと思います。大学課長になった時に、中教審の三八年の答申があったこと、皇先生のご本を頂いたりして、大学課長の仕事に入ったわけでありませう。

2 前川力・佐久間澄・羽白幸雄先輩等のこと

「三九年四月一日 理学部に物性学科設置」とあります。副学長の前川先生(前川功一)のお父様の前川力先生が、理学部長の時です。で、ちょっとここで話が雑談になるのですが、前川先生が理学部長の時に、旧制大学の理学部長会議というのが、広島大学でありました。で、前川部長から「井内君帰って来いよ」と言われて、帰って参りま

した。で、理学部長会議に出ましたが、ずいぶん激しい理学部長会議でありました。三八年というのはですね、理工系学生増募の時です。昭和三五年が所得倍増政策のスタートです。理工系学生増募、工学部と理学部の数・物・化の学生増募を全国的にやり、講座も増えました。それで理学部長会議に出ましたら、前川部長が、「井内君、今日の理学部長会議は激しいよ」と、「しかし、よく勉強して帰りなさい」と。その頃は、地球観測年の動きがあり、生物が生命科学に展開してゆく時でした。「理工系学生増募ということで数・物・化に学生が増えて、教官も増える。それは結構だよ。しかし、理学という全体を見た時に天文・地学・生物という極めて重要な部分をどういうふうに見えるか。ある学部の間がバランスをとって発展していくということが必要である。その意味で数・物・化のみならず、生物・天文・地学にも力を入れることが大事ではないか。大学課長としての見解如何。」ということでした。理工系学生増募に入ったわけですね。しかし、学問全体として、学部全体として、大学院の研究科全体としてバランスを失するような進み方をするというようなことが果たして是であるかどうか、という視点を持たなければだめなのだ、ということをご時前川先生に教わりました。前川先生、アカシア会三三回です。私は三二回です。で、翌三九年には物性学科が置かれました。これも雑談ですが、当時理学部に佐久間澄先生という方がおられました。原水爆禁止運動をおやりになったと聞いております。大学課長になりましたからね、佐久間先生がふらっと大学課に来られました。「僕が君のところに陳情に来ると、君、迷惑か」とおっしゃいましたね。「大学のために物性

学科についてよく考えてほしい」と。佐久間先生は、私が物理・化学を教わった先生です。学部全体をどうするかということで、せっかくながら教養部が大学課長になったから、しばらくぶりに会って、いろいろ話してみたいと思われたのでしよう。戦後初めて佐久間先生とお会いできて嬉しゅうございました。大学の歴史にしても、表面に出ない人間関係というものを捉えなければ、やはり本当のものは書けないと思います。

理学部長会議がちょうど土曜日に終わりました。日曜日にゆっくりして墓参りでもして帰ろうと思つてのんびりしておりましたら、羽白先生（羽白幸雄）から電話がかかりました。教養部長でした。「井内君、広島に帰ってきたそうだけれども、理学部長会議が終わつて、大学の建物を眺めて、それで帰つていいと思うか」とおっしゃるんです。「おまえ大学課長だろ。大学課長なら学生の顔ぐらい見ていけ」と。「日曜日から宮島で新入生オリエンテーションが始まるから、来ないか」とおっしゃる。新入生オリエンテーションって何だろうと思つて、日曜日に出かけました。そしたら宮島の国設の宿舎みたいところで新入生の方、あれ五、六〇人から一〇〇人ぐらいたったでしょう。新入生オリエンテーションというものに初めて顔を出しました。で、学生の皆さん、初日ですから、お互いに自己紹介をしましたので、各部屋を回ってみました。食事していけとおっしゃるから、学生と一緒に食事して帰ろうと思つたら、「飯食つてただそれだけで帰る奴があるか」と。「ちよつとおまえ挨拶しろ」。まあ、危ないなと思つたんですけれども（笑）、仕方がありませんので、食堂で、学生の諸君に

話をするようになりました。このような経験は、それっきりで、一回だけです。大学で特別講義なんかしてませんから。昔の広島高等学校の一年生と思つてといつても、何話していいのかわかりませんので、高等学校の時に読んだ小説の話をして、寮歌を歌つて、元気でやつてくれと言つて帰りましたが、その時に羽白先生に言われたのが、「君、この新入生オリエンテーションは、我々のポケットマネーでやつているんだよ。予算はないし、でも何とかポケットマネーでやつてるんだ」ということをおっしゃいました。それで文部省に帰つてですね、「おい、新入生オリエンテーション予算を作れ」と。で、翌年に予算化しました。ですから新入生オリエンテーション経費というのは、広島大学教養部が産みの親であります。羽白先生というのは、まさに旧制高校の代表の様な方で、羽白さんがお作りになった寮歌もあります。時間の余裕でもあれば歌つてもいいのですが（笑）。非常に熱血漢でしてねえ、とにかく暖かい方でした。私に大学生と接触をする機会を与えてくださいました。また、教養部に、いかにして、こういうこと申し上げたら恐縮ですけれども、広島高等学校のスピリットを何とか活かしたいんだというお気持ち、ひしひしと伝わってきました。

あの、教養部、総合科学部の問題となりますと、やはり、何か皆実町にあったあの雰囲気、日本の青年を育てるプロセスにおけるロマンスとして、何か生かせないか。その時に羽白さんから強烈に頂いた私の印象があります。教養部の法制化は大学課長の時でした。これはいろんな理由があつて法制化しました。そのおりの状況を申しますと、名古屋大学の篠原学長（篠原卯吉）をはじめ、北大、九大の学・総長

は皆、教養部長からなされました。名古屋は篠原先生が工学部長から、水野先生（水野高明）も九大工学部長ですね。教養部で、全学のことをつかんだ上で学長をやるんだというのが、当時旧帝大の傾向になりかかった時です。

3 国立学校特別会計・歯学部設置

大学課長の時、国立学校特別会計法を作る作業をやらせてもらいました。国立学校の特別会計制度も、今回の独立行政法人化で大きく変わるんだと思いますが、特別会計制度についてはいろんな思い出があります。ちょうど昭和三十九年が東京オリンピックであり、新幹線が開通した年です。所得倍増政策が三五年で、三九年頃は日本全体アップカーブだったんですね。ですから、いろんなことができた時ですから。パイが少しでも大きくなる時に、何とかして国立学校の財政を強化しようというんで特別会計を作りました。国立学校特別会計は、他の国有財産をただでもらえるが、国立学校特別会計の財産は有償でなければ処分しないという原則にしました。それから、借金できるようにしたのも、この時です。

それから歯学部の設置。東北と新潟と広島に。東北と新潟と広島が、三つ同時に歯学部創設の要求を大蔵省に持ち込みました。いきなり三つも歯学部を作るのは可能か。ところで、東北大が愛知揆一文部大臣のところ。新潟が田中角栄大蔵大臣のところ。広島が灘尾弘吉元文部大臣のところ。いよいよ詰めになったら大変でした。どうしようかなと苦しんでいました時、灘尾先生から電話がありました。夜明けの六

時か、七時かなあ。大学課の部屋で寝てましたら、灘尾先生から電話かかってきて、「井内君ご苦労さん。歯学部大変だね」とおっしゃる。「東北にも新潟にも応援団がある。広島にも心配しておるものがあることは忘れないでくれよ」(笑)。あの灘尾さんがしんみりした声でおっしゃる。腹を決めて、大蔵省に出かけて、だめなら三つだめ、OKなら三つとももらいたいと勝負に出ました。いろいろな曲折を経て、三つ通りました。今となってはよい思い出でございます。

四、庶務課長・会計課長時代

それから、庶務課長をやっている時、日韓基本条約の発効で、日韓の留学生問題があり、韓国に行きました。韓国の次官に会いました。九大の法文学部を出た次官でした。日韓関係の留学生問題の話をして、後、ソウルの日本でいえば教育委員会に行きましたら、教育監という人が出てきまして、流暢な日本語で話をされました。話をしているうち、広島文理科大学の卒業生ということが分かりました。戦前の文理科大学には、大陸からの留学生がずいぶん居ましたから、その方々は、やはり実力があるんでしょうね。当時、韓国の教育界で主流としてやっておられました。昼食の時に牟田学長先生とも話したんですが、実際に韓国とか中国に行きますとね、やっぱり戦前から今日までの広島大学の影響というのは、ずいっと根が生えてますね。やっぱりいっぺん生えた根は伸びますね。人脈というもの。私はそれを非常に強く思います。

それからその次にですね、昭和四二年二月一日、ここに「山中トシ氏より土地一、一一四平方メートル寄付を受け、教育学部附属幼年教育研究施設と附属幼稚園の用地とする」とあります。この時も珍しく灘尾さんから電話、「井内君、山中さんという年寄りがおられる。俺も頭があらんような年寄りだよ。いろんな気持ちを込めてこの土地を広島大学に寄付される。扱いを大事にしてほしい」とおっしゃる。非常に丁寧な陳情でした。それで広島大学の方でも、教育研究施設を作ったり、幼稚園を作られたのですが、今回五十年史を見ておって、そうだったなと思いますのは、女高師を広島が持つておったということです。昭和二〇年の四月一日に女子高等師範学校が広島に作られた。お茶の水、奈良に続いて広島に当時女性の最高教育機関の女高師が作られた。しかしそれは二〇年四月一日であって、作った直後に原爆に遭い、その後三カ所に分散し、その流れの一部が、福山分校となるのでしょね。山中トシさんが山中高女の敷地等ほとんど全部を出してその寄付によってできたのが、広島女高師であった。よって、広島女子高等師範学校だけは、附属山中高等女学校というように附属学校の前に山中という字が入っている。これは日本であそこだけでしょう。それだけの大きな功績でした。国も大事にしました。それがわずかに四ヶ月後の八月六日には、ふっとんでしまった。そして女高師の卒業生が何回かおられるんですけども、その中の一人が皆実町で附属の教官でした。私は附属中学校でバスケット部でした。で、バスケット部の監督教官がそのお方でありまして、戦後何回かバスケット部の同窓会を広島でやりました。その時にいつも出てきておられた小野先生

(小野文子)という方です。で、その方が山中に関係があるということとは知っておったのですが、小野先生からも、頼先生からも今回いろんなことを聞いて、広島大学の歴史の中に女子高等師範の歴史が短い期間ではあったが存在したことを、今度しみじみ思いました。

広島大学は、いろんな学校の歴史を吸収しております。ちょうど今、お茶の水女子大学の運営諮問会議の委員もやってまして、お茶の水をどうするか、附属学校をどうするかということが問題になってますけれども、女子大学は三つあったんだということを、私も不敏にしてあまり考えていなかったことを恥じております。広島大学の歴史をみるにつけて、女高師のことは忘れないでやはり大事にしないと、という気持ちを強くしております。

それから理学部の附属両生類の研究施設。これはカエルですね。西岡みどり先生のお人柄もあつたのでしよう、広島大学の両生類研究所のファンは文部省に多かつたですね。とにかくあれだけのたくさんのカエルを飼って、川村先生(川村智治郎)が学長を辞めても、研究指導をつづけられました。国際的なレベルで研究と教育に厳しく取り組んでおられるというんで。これは会計でも、大学局でも、学術局でも、非常に有名でしたね。

それからだんだん難しいことが出てきます。広島大学も紛争のため四二年、卒業式を分散でおこなう。それから四三年六月一五日、「東大田講堂占拠される」とあります。四三年七月二日から翌四四年一月一九日までが封鎖されておった期間ですね。で、これは私は非常に強い印象が有りましたね。この六月一五日を以て私は会計課長から初

等中等教育局審議官に転任になりました。今日辞令をもらうというのが、一五日だったんです。大臣は灘尾先生でした。あの時は期末勤勉手当闘争も絡んでいました。で、どうもその感じがですね、期末勤勉手当支給の一五日、状況により一五日の支払いが不能になるような恐れありということ、大学の方でもその対策をとっておりまして。六月一五日の未明、東大経理部長から「会計課長、経理部が占拠されました。入れません」という連絡がありまして、断腸の思いで会計課長から初中審議官に替わったのが六月一五日です。九大にジェット機が引っかけましたのは、その少し前でした（昭和四三年六月二日、九大米軍機墜落炎上事故）。夜明けに家に電話がありましたねえ、その時に「国籍はどこだ」と聞いたものです。米軍ジェット機でした。会計課長の時は、そういう時でありました。

それからこの頃、工学部に三、〇〇〇トン圧縮・一、五〇〇トン引張り大型試験機を頂きました。呉海軍工廠で使っていた引張り機で、でかいものでした。ドイツの機械でした。工学部に見に行きましたら、大きな建物に入っていますね。それでこれを東広島市に移したわけです。東広島市に持っていく輸送費だけでも相当な金額でした。東広島市にも見に行きました。そしてその時、説明してくださいました工学部長が、「ちゃんと働いてるんだ。本四架橋の材料試験はこれで行った」。あの、本四架橋の時の鋼鉄の引張り試験ですね、これはあれで行ったそうです。

五、初等中等教育局審議官時代

それから、四四年に医学部に薬学科。これを薬学部にするか薬学科にするかで非常に問題があったのですが、東大に薬学部ができたのは、初めは東大医学部薬学科なんです。日本の薬学部は、医学部薬学科から始まっているのです。どうしようかなということでご相談をしたわけですが、この時は学長先生が川村先生（川村智治郎）ですね。

「医学部で薬学科というのを一つ抱いてもらえるか」と。医学と薬学の関係を、単に医学部の中に薬学科をという意識じゃなくて、医学・薬学を通じた研究、教育を開拓できないかという問題もありました。このことがその後、医・歯・薬の大学院の問題として、動いております。私が広島大学の医学部に敬意と謝意を表しますのは、歯学部を作った時に、あの時の医学部長、浦城さん（浦城二郎）。本当に歯学部を大事にしてくださいましたね。建物にしても何にしても、歯学部を非常に親切にされたのがこの医学部です。薬学も同様です。今度大学院の問題も、医歯薬学総合研究科の新設要求となっておりますけれども、他の大学にない研究分野を開拓し、他の大学にないものを発展させて頂ければ、本当に嬉しいことあります（平成一四（二〇〇二）年四月医歯薬学総合研究科設置予定）。

それから四四年に飯島さん（飯島宗一）が学長。先般も頼先生から「広島大学改革への提言（仮設0）」、広島大学改革委員会の資料を頂きます、改めてじっくり拝見致しました。一切の問題が、当時出ておったと思います。臨時措置法が四四年。で、当時私は初中の審議

官でありまして、直接大学行政はやっていかなかったんですが、大学課長、庶務課長、会計課長と連続して大学のことをやりましたので、だいたいその時に構想があつたりした問題は、その後どうしても気にかかるものですから何となくフォローしておりました。

ちょうど今振り返ってみますと、四五年に西条の総合運動場ができてますね。で、共同研修センターになるのが四七年です。で、西条総合運動場ができた時にですね、あそこを拠点として何かできないかなということがありました。現地にも行きました。振り返ってみて、申し訳ないと存じますのは、体育学部を実現できなかったことであります。西条の総合運動場へ行きました時、よしと思ったのですが。その後体育学部の創設準備室ができて千田町に表札がかかりました時には、川村さん（川村毅）に案内してもらって、私も表札を見に行ったものです。

六、大臣官房長時代

1 広島大学の統合移転について

四六年六月一日、中教審の四六年答申であります。はじめに申しましたように、これは会長が森戸先生です。ですから、三八年答申は森戸さんが主査で、四六答申は森戸先生が会長の時です。四六答申が出た三日後官房長になったんですから、官房長として森戸先生にお会いした時に、「中教審の答申で一番力を入れて実現したいと思われるのは何でしょう」と聞いたら、その時森戸先生は、「いろんなこと

を考えると、義務就学年限を一年早めるということは、まずやりたいものですね」とおっしゃった。当時、子どもの成長が早くなってきたいましたし、国際的に見て将来の日本をどうするか。「先導的施行」という言葉ができた時ですね。その時の森戸先生の頭の中には、義務教育のはじまりを一年早くするという構想が強かったのでしょうか。それも実現しないで来ますけれども。記憶に残っていることであります。

四六年に官房長になりました。この時はもう既に広島大学の移転候補地二四ヶ所が選定された時でありまして、知事を会長とする広島大学統合整備推進協議会ができていました。広島大学の統合移転につきましては、知事を中心として、賀茂学園都市建設基本構想というものが県の方で進行しておりました。それから、用地の取得等を考えてみましても、県の方に非常に力を入れてもらいました。宮沢知事（宮沢弘）、竹下副知事（竹下虎之助）の時です。で、この辺、今考えますとですね、東広島市に統合移転を実現するにつきましたは、大学のご努力で実現したわけですが、大学にそのエネルギーがあつたと思いますが、県に非常にリードして頂けたということは、忘れてはならないと思います。官房長として竹下副知事といういろいろ苦労したものです。それから、大学教育研究センターというのが四七年にできてますが、この大学教育研究センターは、木田さん（木田宏）が強い理想をあそこで実現されようとしたね。広島で。これは今日でも文部省にとつても非常に大事な研究センターでありますけれども、大学の問題を真正面から取り組んでいただいたのはここだと思えます。これは木田さ

んのご功績です。

で、統合移転が評議会決定し、それから知事に用地取得を依頼され、基本構想ができました。それでここにあえて「四八年一月一日 筑波大学設置」と書きましたのは、官房長の時にやった仕事で非常に大きな仕事で、筑波大学法案を通すことでした。反対が強くてですね。通ったのは奥野文部大臣（奥野誠亮）が強い決断をされたからです。参議院においては、河野謙三さん（参議院議長）。文部政務次官は河野洋平さんです。最後は河野洋平政務次官と一緒に参議院の議長公邸に行つて、議長と直接談判までしました。で、筑波大学はいろんな軋轢がありながら、法律で一挙に作つたわけですね。法律で、新しい予算措置で作りました。で、ああいうやり方でいくという筑波大学方式があるのですが、広島大学の将来の像を描く時に、今日も運営諮問会議に意見が出ましたが、教授会、評議会という伝統的な国立大学の運営システム、管理システムを大事にしながら、むしろその長所を活かしながら、同じくらいの大改革ができるかどうか。その意味で筑波大学がこの時にできたということは、貴重な教訓であり刺激にもなりました。しからば広島大学はどうするんだ。筑波大学と同じ方式をとるのか、違うやり方で同じような新しい大学を作り上げるのかというところが、東京文理科大学、広島文理科大学じゃないですけども、東西の大きな問題ではなかったでしょうか。

で、東広島市ができて、それから中期将来計画ができて。ちょうど総合科学部ができる前あたりですねえ。期日がちよつとはつきりしませんので、これは東府君にでも確かめてもらえばいいんですけれども。

これ官房長の時ですね。飯島学長と石川事務局長（石川高稔）と私と三人で東広島市の用地に行きまして、「だいたい何平米だとあそこぐらいまでらしい」、「あそこの葡萄棚はどうしても入るだろう」、「あの水の流れはどうすればよいだろう」と。雨の日でしたね。傘さしながら三人で眺めました。その場所がどうもその後お立ち台になった場所らしいです（笑）。学長と局長と三人で現地へ行つたんですがね、工学部の建築や土木の方がどなたかおられればよかったのですが、我々素人があそこへ行つてみて何万平米と言われてもね、なんだか葡萄があつたりですね、山ばかりでしょ。どうなるか見当つけるのはなかなかのことでした。今懐かしく思い出します。

2 総合科学部の設置

四九年六月七日に総合科学部ができました。総合科学部ができた時、私は官房長であります。所管局長は木田さんなんです。大学課長が大崎さん（大崎仁）。課長補佐が先日次官辞めた佐藤君（佐藤禎一）です。これは木田さんの力も大きかったと思いますし、広島大学の皆さんのご努力、今堀さん（今堀誠二）が先頭でしたね。式部さん（式部久）の地味な底力も強かったですね。式部先生を一般教育の視学委員にお願いできたのがよかつたと思います。一般教育をどうすればいいかというのは、文部省にとって大問題なんです。その視学委員を積極的に引き受けてくださつて。的確なご意見を言ってくれる人は少なかったんです。それで大崎君や佐藤君と相談して、広島大学の式部先生を視学委員にお願いしました。

今日こんな話をするということ、式部さんに「何か当時のことで思い出すことないですかね」って電話をしてお手紙を頂いたんですが、その中で式部先生が「文部省の人たちの言っていること、文部省の人たちの顔をあんまり気にしすぎる。それで右往左往したらやっぱり具合が悪い」と。「自分はある程度文部省の視学委員等やって、文部省の人たちの基本的なものの考え方、これを理解しておったので、仕事をする上で非常に役に立った」と言っておられました。私も、あまり文部省のその時その時の担当者の権限、説得、表情にあんまり気を使ひすぎない方がよい。あまり気を遣ひすぎないで、本音で話せる伝統を持っているのが文部省と広島大学だと思います。これは文理科大学以来の伝統であります。初中局に優秀な教科調査官を送り込んでこられた実績があるわけです。戦後の初等中等局の教科書検定、学習指導要領の改訂、ここに広島大学の教育関係の優秀な先輩が何人か入っておられたことが、広島大学と文部省との間で疑心暗鬼にならずに語り合える雰囲気を作っておったと私は思っています。文部省と大学との関係がいろいろ言われますけれども、設置者は国なんですから、独立行政法人になっても設置者は国です。国以外の何者でもありません。これにはタックスペイヤー (taxpayer) がいるんです。行政は絶対に必要です。その意味ではですね、どうやって国の行政機関を活用するか。どうやって国の行政機関を活用して大学が前進するかという、そういうお気持ちでは是非対応していただきたい。これから非常に難しいところに広島大学も入ってくると思います。日本の大学全体がそうだと思いますが、できるだけ本音で文部省の連中とも話していただき

たい。そのことを特にお願ひ致します。局長の東府君は広島ですから、県人会の親しい友人です。おそらく東府君も期するところがあると思います。どうぞ事務局に対してもですね、一つ率直に本音を話してもらいたい。学長にご相談になると同時に、脇役である事務局長に話してもらう方が万事よろしいかと思ひます。

それで四九年一月三〇日、総合科学部創設記念式典には私も出席しました。名古屋大学の学長さんの芦田さん (芦田淳) は、広島高等学校の卒業生なんです。同じバスケット部です。で、芦田さんと仲良かったもんだから、「広島大学で総合科学部ができたが、これは何となく広島高等学校の生まれ変わりらしい」と言ったら、「それじゃあ俺も行く、行っていいな」と。一緒に壇の上になりました。

七、大学局長時代

で、その次が「広島大学、文部省メモ、評議会に報告」となっていますが、これがどう誤ったか「井内メモ」(広島大学の統合移転に伴う改革整備計画について)といわれているものであります(笑)。五〇年度の予算要求を大学局長の時とりまとめました。総合科学部は官房長の時六月七日に設置され、その六月一八日に大学局長になって、そして六月ですから五〇年度予算要求をすぐしなければいけません。期間は二ヶ月くらいですね。ところが官房長の時に大崎課長や佐藤君と一緒に仕事をしておりましたから、相談する必要もないくらいお互いに分かっていました。ところで、予算は毎年毎年要求して、毎年毎

年査定を受けなければいけません。文部省の人間も大蔵省の人間も毎年、人事があつて交代します。で、筑波大学のようにこういうふうは何年にはどうすると法律で決める方式でないのですから、それで毎年毎年やって長年月かかる大きな目的を達成するためにはどうしたらいいか。大崎君や佐藤君に「どうするか」と。「そりゃあ、大蔵省に将来の姿はこうなりますって言わなきゃ、局長それは無理ですね」って言うから、「そうさ。どうする」。「それは今の予算制度では無理です。法律で規定しない以上はだめです」。それはそうさ。しかし、単年度主義でゆく以外にない。今のやり方でやるとすればどうするか。できるだけ明確な説得力のある全体計画を大蔵省に持ち込む以外にない。しかし文部省が大学予算を持ち込むのは、トップダウンではないのであつて、ボトムアップである。大学側の方の要請に基づく。大学の方からの要請を受けて、文部省は要求するという伝統的な概算要求のスタイルを守らねばならない。ですから、飯島学長とやりあつておつて、総合科学部を作つたりいろいろなプロセスがありましたから、統合移転をした時に、いったいどういう広島大学の姿を描くのか。博士課程まで置くとしなければ、博士課程の建物は建たないわけです。敷地の確保もできないのです。ですから、博士課程を全部作るんだと。森戸先生以来、中国・四国の代表大学であるとなつてきているのだから。だいたい明治に東大を作つて以来、帝国大学を全然作らなかつたのは戦後だけです。七つまでいって戦争となつてとまつている。だから、もし八つ目を作るとすればどこだ。だれも分かんないです(笑)。いろんな資料を見ますとね、どうも諸説ありましてね。広島説、神戸説、

金沢説。せいぜいね三つくらい。このあたりは呼吸です。それで結局、あのメモを作つた時はですね、森戸先生の三原則「中四国の代表大学である、地元にとって意味のある大学になれ、国際性を持った大学になれ」、あの森戸先生の三箇条が生きていたと思いますね。私はそう思います。だからああいうメモを作つたのですが。

今、あのメモを、特に広島大学の資料に「井内メモ」なんてあるから、ぞつとするのですが。感情を捨てて冷静に見るとですね、正直、広島大学の努力もあり、文部省の努力もあり、大蔵省の協力もありました。ただ、あの時に描いたものの全部が実現したわけではないが、未来に向かつての夢のある方向性としては、意味があつたかなと思つています。永遠にアイ・エヌ・ジー (ing) ですね。今顧みて東雲を独立させるといふ大問題もありました。教育の中から学校教育学部を独立させるといふことを書いたわけですね。しかし全体構想からいふならば、大学院の領域、教育の領域のために、相対的にいっぺん独立したもの何らかの形でドッキングすることができないだろうかといふことが悲願でした。それも実現させていただきました。とにかくあの井内メモというのは古いものでありまして、別に大臣決裁をとつたもんじゃありませんから。局長が大蔵省に説明するにあつて、これがなければ予算要求できないということ。あれを書いてくれたのは大崎君と佐藤君です。よく書いてくれました。嬉しかったです。省内の者も、大蔵省の連中も、ある意味でみんな広島大学のためにという気持ちがあつたと思います。今、大学問題が一番難しい、明治以来一番難しいところに来ていますから、ここをどううまく乗り切るか。よ

ろしくお願い致します。

それから、「平和科学研究センター（学内措置）設置」と書いてあります。平和科学というのが広島大学に非常に大事だということなのですが、学内措置だった。しかし、マスコミの扱いは非常に大きかった。私の母は原爆で亡くなっていますし、平和科学が大事だったというのは非常によく分かりますが、大学の中での位置づけ、その節度が大事ではないかと痛感しました。

八、二度目の大臣官房長時代

それから大臣官房長をもういっぺんやりました。原隊復帰を命ぜられたのです。で、これは永井さん（永井道雄文部大臣）と自民党のヤングパワーとの衝突があり、永井さんからも「もういっぺんやってくれ」になって、二度目の官房長を務めたわけです。二度目で通算五年位やったというのは、各省通じて戦後ないでしょうね。「おまえ、趣味、官房長か」と言われて（笑）、「冗談じゃない」と。

それで官房長の時に、工学部一学科が四類に改組されました。博士課程の問題に結びつきます。東広島市への統合移転の問題にしても、工学部が一番先に移られました。工学部が膨張して、千田町ではどうにもならないことがあったでしょうけれども、しかし工学部がお移りになった時に現地を見ましたが、最初に移られた工学部は本当にご苦労が多かったですね。しかしあの時に工学部があれだけ毅然として移って、不便な中でがんばってもらったということが、本当に広島

大学の統合移転促進に大きな力となったと思います。

それから政経分離がありました。法学部・経済学部です。これについて一つ思い出しますのは、大学課長になった時に、佐賀大学の学長、今中次磨さんです。大学課の部屋に佐賀大学学長今中次磨さんが来られたのです。佐賀大学からこれは何の話なのだろうと思つたら、そうじゃなくてですね。「俺はおまえの附属中学の先輩である」とおっしゃってから、「広島大学の政経は頼むぞ」と。佐賀大学の陳情じゃなかったですよ。それはやっぱりアカシア会の先輩（第三回、明治四五（一九一三）年卒）ですからね、何とも身震いしましたが。やっぱり広島大学に関係した人は、他の大学に移られてもOBになつても、深い思いをもつておられる方が、非常に多いのじゃないですかね。私はそう思います。

それから核融合理論研究センター。核融関係はですね、いろんな意味で広島に期待するところが非常に大きいですね。今、放射光の研究とかいろいろとがんばっておられます（放射光科学研究センター）。当時、科技厅が放射光の研究施設を関西に求めた（高輝度光科学研究センター、平成二年一二月設立、兵庫県佐用郡三日月町）。広島大学との関係をどうするか頭の痛いことでした。こういう分野の研究で大いにがんばってほしいものです。

それから五三年に学校教育学部が設置になりました。学校教育学部の独立の時とか、それから水畜産の改組の時とか、いろんなご苦労をされた関係者の方々のことを懐かしく思い出します。こういう学部が逐次できていったことは、非常に嬉しいことでした。

五五年のところに「今堀誠二日本文学士院賞(七〇回)」とありますが、古い話になりますが、広島文理科大学に藤原武夫先生という方がおられました。この方は日本文学士院賞(三八回)なんです。で、今堀先生が七〇回。その間川村先生の文学士院賞(五二回)があります。藤原武夫先生というのは物理学、金属結晶が専門で、二三年に文学士院賞をもらっておられます。会計課の副長をやっている頃、ずいぶん元気なお方で、第一ホテルに泊まって、文部省にふらつと来られて、来られると私のところにも寄られて、いろいろお話を承りました。これもアカシア会(第六回、大正四年卒)なんです(笑)。で、今堀さんが五五年六月に文学士院賞をもらわれたんですが、七月に私は教育会館の館長になったもんですから、今堀先生に教育会館で講演をしてもらいました。文学士院賞をもらいになったり、芸術院賞をもらいになった方に教育会館で講演してもらう慣例になっておりました。その時に驚いたのは、今堀さんの附属中学の同期の人、未亡人も含めて、二〇名ぐらい集まりました。私はね、昔の附属の人たちの結束というのは大変なものだと思いましたがね。戦後、引き揚げて来たりして就職がなかった時に助け合っておられますね。それで今堀さんの講演会が終わったら、「井内君ちよつとそこの食堂でアカシア会が集まって飯を食うから来い」とおっしゃる。仙台から来られた方もあり、皆さん楽しい夕食会でした。

九、国立教育会館館長時代

五五年に文部省を去って、国立教育会館の館長になりましたが、当時日本の財政は深刻なSOSでした。臨時行政調査会の参与を五六年からつとめました。これが土光臨調(委員長が土光敏夫)です。日本の財政はこのままではもうだめになる。どうやって財政カットするかということが課題でした。その後バブルがあつたりして景気のいいよなことがありましたけれども、現在はその時より深刻な状態になっているのではないかと思えます。ゼロシーリング、マイナスシーリングが始まったのはこの時です。それまではですね、各省が予算要求する時に要求枠、シーリングがあり、前年度の予算総額の何割増しとするか、例えば二〇%までは予算要求してよろしい。それがゼロシーリングになり、マイナス・シーリングになったのは、この時です。

工学部が昭和五七年に無事移転完了。頼實先生(頼實正弘)の時ですね。医学研究科の件(医学研究科を医学系研究科とし、分子薬学系専攻・生命薬学系専攻を増設)もありました。ちょうどこの頃ですね、拠点大学方式といってASEANその他の学术交流、特定大学との交流というのを始めました。で、頼實先生とご相談して、「広島大学は醸造学科で有名だけれども、ASEANと拠点大学方式で」ということで、北スマトラ大学と大学間国際交流協定を結んでいただきました。これは、文部省としても注目したことでありました。

それから、五七年に「『一般教育のことなど』講演」とあります。

これは五七年六月、広島大学で第三〇回中国・四国地区大学一般教育

研究会が開催され、四四大学参加のもとに熱心な討議がされましたが、その際、依頼を受けて帰広し、一般教育のことなどについて講演を致しました。「メタセコイア」一六号に、そのときの記録が載っておりませんが、一般教育の課題は、今日もひきつづきの課題だと思えます。広島大学が教養的教育として非常に努力しておられることに心から敬意を表します。なお、この時の講演で、わが国の大学の一般教育の基準の変遷等についてふれております。

それから行革審（昭和五九年五月一四日行政改革審議会参与に就任）。大学院の整備（昭和六〇年四月一日生物圏科学研究科設置）。工学部跡地処分。この問題で、頼実先生が荒木市長（荒木武広島市長）とぶつかった時ですね。これ、私もつらいことでした。荒木市長も広島高等学校の先輩なんです。この問題になると向こうも口聞かないしね、こっちも口聞かないし。市会の突き上げもすごかったようですね。しかし、ようやく工学部の跡地処分を決定したんですが、国有財産中国地方審議会で決定してもらったのであります。今度こちらへ来るんで、文部科学省の会計課にその時の書類を持って来てほしいと言ったら、写しを持ってきてくれました。今読んで分かります。ここは時価で買ったことはただで返したことにしようとか（笑）、ここは時価で買ったことにしようとか、そうやってトータルをどこに納めるかなんですかね。知事のお父さんですね、藤田知事（藤田雄山）のお父さん（藤田正明）が参議院議長だったんです。非常にものごとをまとめてくださる方だったので、とにかくいただきたい収まりそうになったところで、参議院議長によしよしと言ってもらって、ほっとしました。

今考えますとね、県が賀茂学園都市構想で走りましたね。そのときはですね、広島大学の統合移転への広島市のかみかたが非常に難しかったのではないのでしょうか。しかし広島大学のヒンターランド（hinterland）は広島だと思えます。広島市民をやっぱり大事にしてもらいたいものです。東広島市の市民が地元の市民であると同時に、明治以来の学都であった広島市も、大学に対する市民の気持ちっていうのが非常に強いものがあるんです。そのところはやはり、広島市民、東広島市市民が、広島大学のやはり母体としての市民なんだという、やはりそういうお気持ちでやって頂けると、元広島市民としてありがたいと思えますので、ご陳情申し上げます（笑）。寮歌ではありませんが、三篠川と瀬戸内海を歌い込んだ広島市の学生生活をと、私は今でもそう思ってるんです。東広島市の山なみもいいですけど、広島市だとか東広島市だとかいう地方公共団体の区切り方によってどうこうされるものではない。設置者は国ですから、広島市民と東広島市民を同じようにということやって頂ければありがたいと思います。

それから沖原先生（沖原豊）の時にですね、積極的に一緒に仕事したのは日本語教育です。ちょうど外国人に対する日本語教育という問題が出てきて、留学生の問題とかいろいろなことがあって、やはり一つの言葉のまとまりとしての、日本語教育をどうするかという大問題がありました。そのときに沖原先生が、広島大学で主として英語教育関係をおやりになった方で、ジャパノロジー（Japanology）の講義でアメリカでがんばっている方がいる。言語教育においては英語教育がやはり一番実績があるので、その裏返しに日本語教育という発想

があるわけだと積極的な意見を頂きました。これは文部省としても非常にありがたい提言でした。この点はよろしくお願い致したいと思えます。

それと六一年に、地域研究、法学研究、経済学研究が一本になって、社会科学研究科博士課程を設置することになりました。これはやはり、例のメモのある部分がここで実現したのではないかと思いました。それから、時間もありませんので少し急ぎますと、集積化システム研究センター。これは私は中身は素人ですからあまり分かりませんが、これも、やはり文部省の学術関係で注意してあるものではないかと思えます。それから生物生産の附属農場が東広島市に無事移転した時に、いったいどのようなことかと思つて、見に行きました。牧場も拝見しました。農水省の助成金のようなものを活用して牛のこをやつておられる教授から、ご説明を承りました。文部省に入った時に「広島大学には変わった学部があるぞ」と。「何だ」と言うと、「水畜産学部。牧場と魚を捕るのと一緒になつとる」(笑)。広島大学にしかない。だから水畜産というのはどういうことなんだろうと思つておつたんですけれども、改組によつて新しい面を開かれました。

六二年に、岡本哲彦総合科学部長の刺殺事件がありました。このときに沖原先生が教育会館の館長室にお見えになった。お互いに絶句しましたね。広島大学の統合移転、それによる新しい広島大学の創造に、総合科学部が大きなエネルギーになったわけですが、その総合科学部でこういう事件が起こつたのはどういうことかと、学長と二人、館長室の天井をにらんで、何分間か絶句した記憶があります。広島大

学にとつての私の二つの悲劇は、この問題とさっきの附属中学校の生徒が室積で死んだことであります。

一〇、東京国立博物館館長時代

東京国立博物館の館長になりました時に、放送大学の広島地区のビデオ学習センターのセンター長に稲賀さん(稲賀敬二)が就任されました。たまたまですね、こちらにまいろうと思いましたが、つい先日稲賀さんの奥さんから「主人は亡くなりました」と連絡を頂きました。私は存じなかつたものですから弔意も表さなかつたんですけれども、稲賀君は広島高等学校の後輩であります。国文学の関係では非常に重要な役割を学会でもやつておられましたし、学習センターでもいろいろご努力いただきましたが、不幸にして亡くなられたようであります。謹んで稲賀君の冥福を祈ります。

今度メモを作るので見ていましたら、株価暴落、バブル崩壊というのが平成二年一〇月に入つております。そうすると、田中隆荘先生が学長になられた時は、もう株価暴落になつてたんだということに気付きました(笑)。さて、大学審議会の「大学設置基準等及び学位規則の改正について」の答申作成に私も参画致しました。いろいろと問題もあると思いますが、とにかく大学改革が歩みはじめました。そして、学位授与機構が置かれました。評議会の議長が飯島さんです。私も評議員をやりました。大学制度の中で大学以外の者が学士号を授与するというのですから、大問題だったんです。そのときに国大協側とい

いますか、大学側との意見をとりまとめるのに飯島さん苦勞されました。ちょうど評価機構の仕事もやることとなった時に飯島さんも私も任期満了につき辞めたわけです。それで今、評価機構になりましたね、評価機構に二・三人一緒に勉強してる研究者もおりますが、機構長も非常にご苦勞です。少しあの機構にいろんなものよせすぎますね。今非常にご苦勞しておられますが、その元となったのはこの学位授与機構であります。

それから平成三年に学士院賞を小林さん（小林芳規）がもらいました。角筆の研究です。それで日程を見ますとね、平成三年一月が湾岸戦争、ソ連崩壊が三年一二月です。非常な激動ですが、小林さんが学士院賞恩賜賞をもらった。これがまた不思議な因縁でした。角筆というのはこれよりもちょっと長いぐらいの、これぐらいですかね、竹または木で作つてある小さな鉛筆のようなもので、それに紐がついております。昔紙が非常に貴重だったから、紙に押し書きがしてあるんですね、行間に。それを角筆というんです。それを小林さんが研究を始めて、今三千点ぐらい発見されて、出てるんですかね。それで中国でもずいぶん発見されてますし、今度韓国で発見された角筆がどうも平古止点に似た口調が書いてあるということ、韓国と日本の文化の関係で、新しい研究が進められている由で、近く学会で発表されるそうです。その角筆が一本東京国立博物館にあるんです。知らなかったんですが、小林さんから電話がありました、「広島大学の小林といいます。角筆の研究やっています」と。角筆の本物が東京国立博物館にあるようです。これは京都のお方から博物館に入ったものですね。見た

いとおっしゃって、「あるのかなあ」と調べたらありました。それで、小林さんが来てそれを確認されました。今堀先生と同じように、東京国立博物館の講堂で小林先生にも講演をしてもらいました。ところで、角筆スコープとかいって、押し書きがしてありますから、こう斜にして見ないとよく見えないですね。こうして見る角筆スコープとかいうものを、田中隆莊学長も協力して作られたんですね。それでそのときに、田中先生に「いやー、あれは大変な研究であるから応援したんだ」と言われました。「五十年史」にその写真が載っております。

一一、放送大学教育振興会会長時代

それから理学研究科の独立専攻。独立研究科とか独立専攻というのは学校教育法の改正をおこなって、独立研究科の設置が可能になりました。これは永井道雄文部大臣、私が大学局長の時に永井道雄大臣から、「学部中心でいいけども、大学院だけでも大学になれんか」と。独立大学院大学です。「独立研究科ができないか、独立専攻はどうだ」とつてことになって、その法改正は、大学局長の時、永井大臣の時におこなわれました。それが今、逐次実現をしておるものでございます。

それから原田さん（原田康夫）の時代になって、私もこれ知らなかったんですが、「五十年史」をみると体育学部断念というのがあってですね。私はね、体育学部断念のご相談は受けてないですよ（笑）。今度初めて発見しました。

それから「平成七年一月一八日 附属高校で講演」とあります。ちょ

うど神戸の大震災があった時、皆実町の附属に情報教育棟ができて、アカシア会で寄付金なんか出していたものですから、その落成式も兼ねて私に来いというので、じゃあ附属に出かけようとなったのですが、附属の方の計画に引っかけたんです。中学生も高校生もいたんですかね、何百人かがこっち向いてみんなこう座っているんですよ。とにかくびっくりしました。見たら半分が女の子でしょう。女の子といたら怒られるでしょうが、ともかく附属の連中に講演をしました。ああいう年代の人たち何百人も前に話をしたのも一生にいつべんですね。何とも脂汗の出るような講演でございました。その時に若い諸君に言ったのは、「母校を大事にするということはどういうことか。それは若き日の初恋のようなものである。初恋の話は第三者にしてもよく分からないんだ。密やかなるものである、分かったか」と言ったんです(笑)。「惚れろ。附属に惚れない奴にアカシア会の会員になる資格はない。附属におることを誇りに思って、附属に恋をしろ。初恋の味は他人に語れるものではない。一生ひめやかにしておれ」と。分かったような顔をしたのはあんまりありませんでした(笑)。大震災の時ですから、空路帰広して講演したわけでありませぬ。

それから、統合移転完了、事務局移転もありますが、統合移転完了式典には失礼しました。精根尽き果てるまで仕事をした時はですね、「戦いすんで日は暮れて」という昔の軍歌が歌いたくなるんですね。うまくいったっていつって大喜びする心境になれないですよ。そのためにどれだけの人が泣いたか、苦勞したか、また何が実現しなかったか、全部分かってますから。やっぱりね、事柄が終わった時はね、一人静

かにしたいものです。で、やはり統合移転に若干でも関わった者と致しますとですね、それが本当に長い目でみてどういう意味をどれだけもつか。統合自体、絶えず現実の批判を受け続けてるわけですから。その上、「井内メモ」なんていわれるともう恐ろしい限りです。長い目でみればここは間違いはなかったかとか、いろんなことが出てくるだろうと思います。私にとつては統合移転途半ばの心境であります。

事務局が移転しましたが、新キャンパスの環境といますか、雰囲気が大事です。筑波大学に行つて気付いたんですが、筑波研究学園都市のライトの光は独特なんです、あれ。橙色をしたような独特なライトの光でした。非常に清潔です。これで人間が住めるかというほど清潔ですね。今、少しできたようですが、だいたい赤提灯もないし、お地藏さんもない。まさに人為の都市ですよ。それでは人間はおかしくなるんじゃないのかねと。まっすぐの道ばかりじゃだめなんだ、散歩道とか曲がり道があるのが大学じゃないかと。これはある大学の方がおっしゃったことです。「君ね、大学の中はね、まっすぐな道ばかりじゃだめだよ」と、「曲がりくねった散歩道が大事にされる。大学の構内だけはそうしてくれ」と。「AからBの地点に行くのにまっすぐ行けばいいっていうのは分かっているんだ」と。それで「舗装して道路を立派にするのもいいけど、しかしそればかりじゃ人間は育たないんじゃないか」と。その意味で東広島市のキャンパスも、池のあたりとかですね、どこかに散歩道があり曲がりくねった道が大事にされるような配慮がほしいですね。やっぱり人為で作ったところは、長い風雪の中でできたものの持つてるよさが乏しくなりがちです。

おわりに

今現在の広島大学の大学院の研究科について、今の名前の研究科、いつできたか古い順に並べてみました。一番古いのが二八年、文と理ですが、教育は平成一三年から変わりましたね。新しい大学院研究科のスタートです。見ますとね、広島大学の歩みそのものだと思います。今の大学院研究科がいつスタートしたかというのをずっと並べてみますと感慨無量です。広島大学の統合移転の時の目標、広島大学がいかにして大学院を重点とする総合大学として発展してゆくか、それが逐次実現したことをしみじみ思います。平成一四年度予算においても、医・歯・薬の研究科、アジ研（アジア経済研究所）との関係プレーもありませんね。大学院の整備のため、非常に広島大学が全学的に苦勞して今日までこられたということに、心から敬意を表します。

それで、ここです、最後に一つ申し上げたいと思いますのは、広島大学全体が独立行政法人になった時にどういうふうになっていくかという大問題がありますが、広島大学にとってやはり附属学校問題というのは、私は大きいと思います。それで、今度帰広するにあたりまして、これもまあいらんことと言えそうですが、私が附属中学校の生徒だった頃からの主事、校長さんを見てみました。入学時、学長は塚原政次さんで、主事は第六代勝部謙造先生、そして第七代の河野通匡先生。このときに私は附属中学から広島高等学校に移りました。第一二代の古賀昇一先生は恩師です。第一三代の萩野源一先生、それから第一四代上野実義先生。第一五代野地潤家先生、鳴門教育大

学の学長をおやりになり、その折請われて参与をやりました。今でも野地先生とお付き合ひしております。附属の校長、昔は主事さんです。主事、校長をずっと並べてみますと、第六、第七、第一二、第一三、第一四、第一五、いずれも私の恩人であります。先ほど申しました福山にしてもですね、女高師の関係もあるようです。教員養成関係は今非常に深刻な課題にぶつかっております。広島大学の教育関係の学部が、それぞれの思いもあつたと思いますが、難しい問題も乗り越えて今のような形になられたわけで、それだけにこれから教育関係がどう発展していくか、附属がどうなるか、これはもう私、元文部省におつた人間というよりも、それらの学校にお世話になった人間として正直心を痛めております。どうぞ広島大学全体としてもですね、附属もまもなく百周年になります。日本の教育界で堅実な学風を誇った広島高等師範学校も創立から既に百年を経過しております（創立明治三五年）。広島大学にみなぎる教育的な情熱と学生に対する情愛。そういう教育を非常に大事にする学風を誇つて来たんですから、これから広島大学がどのように展開されようとも、私はこの歴史といひますか、伝統を大事にして頂けないものかなと思います。元東京アカシア会会長、元広島高等学校関東同窓会会長として（笑）、こういう席で恐縮ですが、学長さんはじめ皆さんに嘆願を致します。どうぞよろしく願ひします。

最初申しましたように、このメモ初めて作ったもんですから、これからずいぶん加除訂正しなければならぬと思います。先ほど、椎茸と切り干し大根は漬けて元の水に戻さなきゃだめだつてということ申し

ましたけども、時代の流れをこれに入れたものをもう一表作ってるんです。そうしますとね、所得倍増政策が三五年、伊勢湾台風の災害復旧が三五年、東京オリンピック・新幹線が三九年、日韓基本条約が四〇年。それから文化庁ができたのが四三年、そのときの文部大臣が灘尾さんなんです。文化庁という看板の字は灘尾さん。文化庁の発足というのは私にとって忘れられないことです。それから浅間山荘事件が四七年。学制百年も四七年。それから円の変動相場制、これ四八年。三六〇円レートが終わった時ですね。それから人確法（学校教育の水準の維持向上のための義務教育諸学校の教育職員の人材確保に関する特別措置法）、私立学校法、主任制、日中条約、大学入試センター等。共通一次試験のスタートは次官の時でした。いろんなことがありましたが、そういう時代の流れをこのメモに加えて行きたいと思っております。気付いたところからこれに付け加えて、時々成果は頼先生にご報告しますので、よろしくお願い致します。

まとまりのないお話で恐縮でしたが、最初にお話ししましたように、客観的で冷静なつもりでございましたが、最後は陳情まで致しまして（笑）、悪しからずお許しください。ありがとうございます（拍手）。

（いない けいじろう・

日本視聴覚教育協会会長、元文部事務次官）

本稿は、広島大学五十年史編集室主催第一二回研究会（二〇〇一年一月二七日、リーガロイヤルホテル広島）において行われた講演を文章化したものです。文部省の側から見た広島大学についての貴重な内容であり、改めて井内慶次郎氏に感謝します。

（広島大学五十年史編集室）

広島大学メモ

(平成13年11月27日)

		歴代学長		
昭和25年 4月19日		森戸辰男学長就任		大学院設置 (文学研究科・教育学研究科・理学研究科) 医学部設置
	昭和28年 4月1日			
	昭和28年 8月1日			
昭和30年 4月1日	(昭和33年 4月30日まで)		大臣官房会計課副長	
	昭和31年 4月31日			県立医科大学の広島大学医学部へ移管完了
	昭和32年 4月1日			医学部の広島市転出に伴い呉市に分院設置
	昭和36年 4月1日			原爆放射能医学研究所設置
	昭和37年 5月11日			川村智次郎, 日本学士院賞 (第52回)
	昭和38年 1月28日			中教審「大学教育の改善について」答申 (第19回)
昭和38年 4月1日		皇至道学長		
”			大学学術局大学課長	
	昭和38年 4月1日			工学研究科 (修士) 設置
	昭和39年 4月1日			理学部に物性学科設置
	”			広島大学皆実分校を教養部
	昭和39年 4月3日			国立学校特別会計法公布
	昭和40年 4月1日			歯学部設置
昭和40年 6月1日			大学学術局庶務課長	
昭和41年 7月1日			大臣官房会計課長	
昭和41年 7月15日		川村智治郎学長		
	昭和42年 2月1日			山中トシ氏より土地1,114㎡寄付を受け, 教育学部附属幼年教育研究 施設と附属幼稚園の用地とする
	昭和42年 6月1日			理学部附属両生類研究施設設置
	昭和43年 3月25日			紛争の為42年卒業式を分散で行う
	昭和43年 6月15日			東大安田講堂占拠される (昭和43年 7月 2日~昭和44年 1月19日)
昭和43年 6月15日			初等中等教育局審議官	
	昭和44年 1月 9日			全学共闘会議結成
	昭和44年 2月18日			学長辞職
	昭和44年 4月1日			医学部に薬学科設置
昭和44年 5月 7日		飯島宗一学長		
	昭和44年 7月31日			広島大学改革への提言 (仮設0) (広島大学改革委員会)
	昭和44年 8月 7日			大学の運営に関する臨時措置法公布

	昭和44年11月11日			将来計画特別委員会設置
	昭和45年6月13日			西条総合運動場落成
	昭和46年6月11日			中教審「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本施策」答申(第22回)
昭和46年6月22日			大臣官房長	
	昭和46年12月14日			移転候補地24ヶ所を選定し、評議会報告
	昭和47年4月1日			歯学研究科(博士)設置
	昭和47年5月1日			大学教育研究センター設置
	昭和47年11月24日			「統合移転」を評議会決定
	昭和48年2月8日			統合移転地を広島県賀茂郡西条地区に決定、公表。学長、用地取得・確保を県知事に依頼
	昭和48年6月22日			「広島大学統合移転と改革についての基本構想」策定
	昭和48年10月1日			筑波大学設置(開学49年4月)
	昭和49年4月20日			東広島市発足(西条町、八本松町、志和町、高屋町合併)
	昭和49年5月14日			「広島大学統合移転・改革についての中期将来計画」を基本計画委員会が評議会に報告・発表
	昭和49年6月7日			総合科学部設置
昭和49年6月18日			大学局長	
	昭和49年7月8日			第1回総合科学部入学式
	昭和49年9月10日			広島大学、文部省メモ、評議会に報告
	昭和50年7月8日			平和科学研究センター(学内措置)設置
昭和50年11月19日			大臣官房長	
	昭和51年4月1日			工学部11学科を四類に改組
	昭和52年3月29日			用地取得協議了解
	昭和52年4月1日			工学研究科(博士課程)設置
	昭和52年5月2日			法学部、経済学部設置(政経学部 分離・改組)
昭和52年5月7日			竹山晴夫学長	
昭和52年6月10日			学術国際局長	
	昭和53年4月1日			核融合理論研究センター設置
	昭和53年6月17日			地域科学研究科(修士)環境科学研究科(修士)設置
昭和53年6月20日			文部事務次官	
	昭和53年7月11日			評議会「学部等移転年次計画」決定

	昭和54年1月13日			国立大学共通一次試験
	昭和54年4月1日			生物生産学部設置(水畜産学部改組)
	昭和55年3月22日			工学部建設着工
	昭和55年4月1日			学校教育研究科(修士)設置
	昭和55年6月11日			今堀誠二, 日本学士院賞(第70回)
昭和55年7月1日			国立教育会館長	
	昭和55年11月4日			体育学部創設準備室設置
	昭和56年4月28日			臨時行政調査会参与
昭和56年5月21日		瀬實正弘学長		
	昭和56年8月1日			大学設置審議会委員
	昭和57年3月31日			工学部移転
	昭和57年4月1日			医学研究科を医学系研究科とし, 分子薬学系専攻・生命薬学系専攻増設
	昭和57年6月4日			北スワトラ大学と大学間国際交流協定締結
	昭和57年6月11日			「一般教育のことなど」講演
	昭和59年5月14日			行政改革審議会参与
	昭和60年4月1日			生物圏科学研究科(博士課程)設置(環境科学研究科・農学研究科改組)
昭和60年5月21日		沖原豊学長		
	昭和60年11月27日			工学部跡地処分(1回目)決定(国有財産中国地方審議会)昭和61年5月27日(2回目の決定)昭和63年6月13日(3回目の決定)
	昭和61年4月1日			教育学部に日本語教育学科設置
	〃			社会科学部研究科(博士課程)設置(地域研究研究科・法学研究科・経済学研究科)(修士改組)
	昭和61年4月5日			集積化システム研究センター設置
	昭和61年7月31日			生物生産学部附属農場を東広島市に移転完了
	昭和62年7月21日			岡本哲彦総合科学部長刺殺事件
	昭和62年9月18日			大学審議会委員
	昭和63年3月31日			生物生産学部移転
平成元年4月1日			東京国立博物館長	
	平成元年4月1日			放送大学広島地区ビデオ学習センター開設
平成元年5月21日		田中隆在学長		
	平成3年5月17日			大学審議会「大学設置基準等及び学位規則の改正について」答申
	平成3年7月31日			学位授与機構評議員

	平成3年6月10日			小林芳規, 日本学士院賞・恩賜賞 (第79回)
	平成4年4月1日			医学部に保健学科設置
平成5年1月1日	平成5年4月1日		放送大学教育振興会会長	理学研究科に遺伝子科学専攻 (独立専攻) 設置
平成5年5月21日		原田康夫学長		
	平成5年9月14日			体育学部断念
	平成6年4月1日			国際協力研究科 (博士課程) (独立研究科) 設置
	平成7年1月18日			附属高校で講演
	平成7年10月17日			「広島大学の理念」を評議会承認
	平成7年11月1日			統合移転完了式典
	平成8年11月29日			第1回広島大学懇話会 (第2回: 9年12月3日, 第3回: 10年12月3日, 第4回: 11年12月16日)
	平成9年1月31日			事務局移転
	平成9年4月1日			副学長制設置
平成9年7月1日			日本視聴覚教育協会会長	
	平成10年4月1日			先端物質科学研究科 (博士課程) (独立研究科) 設置
	平成10年10月26日			大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方針について—競争的環境の中で個性の輝く大学」答申
	平成11年11月5日			創立50周年記念式典
	平成12年4月1日			教育学部・学校教育学部を教育学部に改組
	”			広島大学運営諮問会議委員
	”			教育学研究科・学校教育研究科を教育学研究科に改組
平成13年5月21日	”			夜間大学院社会科学部研究科マネジメント専攻 (東千田地区) 設置
平成13年11月27日		牟田泰三学長		第3回広島大学運営諮問会議